

## 第3章 小規模保育の効果と評価

### 3

小規模保育所の特徴は、小グループでの保育、かつ、保育者一人あたりの子どもの人数が比較的少ない保育である点は、これまでに述べてきたとおりです。このような保育が子ども、保護者、保育者などに与える影響には、他の保育形態と比べてなにか異なった点があるのでしょうか。この章では、国内外の研究成果を概観することで、小規模保育が子どもの発達に与える影響について現在わかっていることをまとめます。また、小規模保育所に子どもを預けている保護者へのアンケート結果を通じて、小規模保育所は保護者からはどのような評価を受けているのかを探ります。

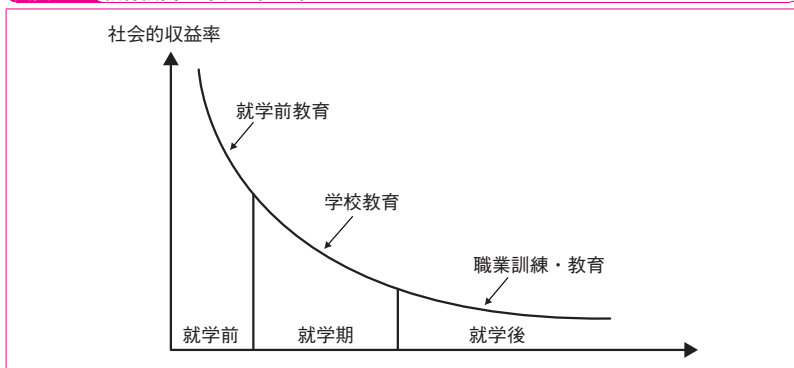
### 3-1. 小規模保育が子どもの発達に与える影響

乳幼児期の保育や教育が、生涯学習の基礎となり、その後の生涯の幸福度に一定の影響があることは、現在広く認められています。もっとも有名な研究はおそらく、ノーベル経済学賞を受賞した労働・教育経済学者ヘックマンによる研究でしょう。「教育経済学」とは、データに基づいて教育を経済学的手法で分析する学問です。ヘックマンの研究からは、「就学前の保育や教育こそが最も投資対効果が高い」ということが明らかになっています（図3-1参照）。所得や労働生産性の向上、生活保護費の低減など、就学前教育を行ったことによる社会全体の投資収益率を調べると、15～17%という非常に高い数値が出たのです。これは通常の公共投資ではあり得ないほどの高い投資収益率です。<sup>6</sup>

その他の同様の研究からも、保育の質は人材育成の重要要因であるということがわかってきたため、先進国の間では、保育の質の確保と向上を重要な社会

<sup>6</sup> ジェームズ・J・ヘックマン「幼児教育の経済学」東洋経済新報社 2015

図表 3-1 教育投資に対する収益率



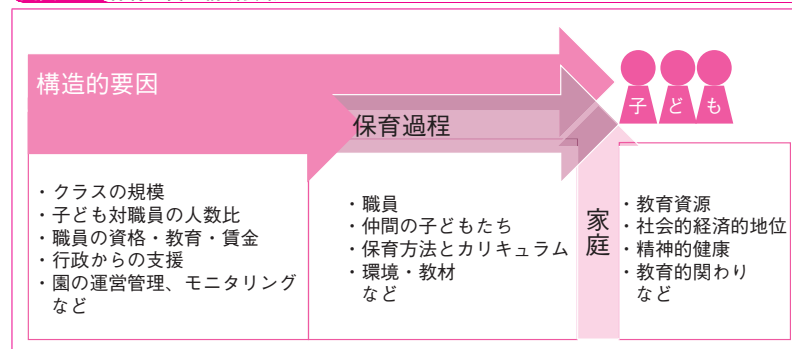
的課題として位置付ける動きが進んでいます。日本の社会保障改革における子ども・子育て支援新制度も、そのような動きのひとつと言えるでしょう。

保育の質はどのように定義すべきか、保育の質を構成する重要な要素はなにか、さらに、それぞれの要素が子どもの発達にどのような効果をどの程度もたらすのか、といった点については、様々な議論があり、現在も各国で研究が進められています。保育に求められる機能や、保育の質についての考え方は、それぞれの国の文化や教育制度によっても異なるため、外国で行われた研究の内容のすべてをそのまま日本の状況にあてはめることはできません。しかし、保育の質とその影響の研究は日本よりも国外で大幅に進んでいる点を踏まえると、国外の研究内容から日本の保育にとって有益な部分を学び取ることは必要です。

### 保育の質の構成要素

日本も含めた先進国が多く加盟する国際機関である経済協力開発機構(OECD)では、2001年と2006年に、加盟国20カ国の乳幼児期の保育と教育に関する大規模な調査を行いました。その調査で利用された保育の質に関する要素の分類は、図表3-2のようになります(保育の現場に直接関わりがあり、かつ子どもの発達への影響が強い要素のみを抜粋しました)。

図表 3-2 保育の質の構成要素



出典：OECD, “Starting Strong II : Early Childhood Education and Care” OECD, 2006 を参考に、全国小規模保育協議会作成

保育の質に関する要素のうち、クラスの規模や保育者の教育・資格など、外形的かつデータで把握しやすい部分が「構造的要因」です。これに対し、子どもと保育者、保育者と保護者、子ども同士のやりとりなど、実際の保育の場で子どもに関わる要素は「保育過程」と分類されています。この分類は、世界各国の多くの保育に関する調査に当てはめることができることから、本書でもこの分類に従い、以下、これまでの研究結果をいくつか見ていきたいと思います。

### 14～54ヵ月の発達と保育の質の関係(1992年 米国)<sup>7</sup>

414人の子どもの対象にしたこの調査は、保育者の配置と子どもの集団規模の最低基準を設定することを目標に行なわれました。保育者一人あたりの子どもの数、そして子どもの集団の規模がどの人数を超えると、保育の質と子どもの発達に明らかに影響するか、という観点から様々な保育施設の子どもの発達度合いを測定した結果、保育者と子どもの人数比が図表3-3の基準を超えると、①保育者の子どもの関わり方が適切でないことがある比率<sup>\*</sup>、②子どもの発

<sup>7</sup>Howes, C. Phillips, D.A.& Whitebook, M. 1992 Threshold of quality : Implications for the social development of children in center-based child care. Child Development, 63 (2) , 449-460

達段階に適切な活動が提供されないことがある比率が、50%を超えることがわかりました。また、集団の規模については、**図表3-3**の基準を満たしているクラスの方が、発達段階に適した活動を行えている比率が有意に高いことがわかりました。

\*適切でない関わり方＝微笑みかけ、発話に応答するなどの対応をしない、声を荒げる、呼びかけに答えないことがある、など。

それでは、保育者の子どもへ関わり方の質と、発達段階に適した活動の度合いは、子どもの発達とどのような関係があるのでしょうか。この調査ではその関係も明らかになっています。調査からは、保育者が適切な関わりあいを多くしている子どもの方が、保育者に愛着を示して、安定しており、社会性が高い行動をとることがわかりました。また、発達段階に適した活動をしているクラスにいる子どもの方が、大人やクラスメイトなど他者との関わりに興味を持ち、社会性が高い行動をとることもわかりました。

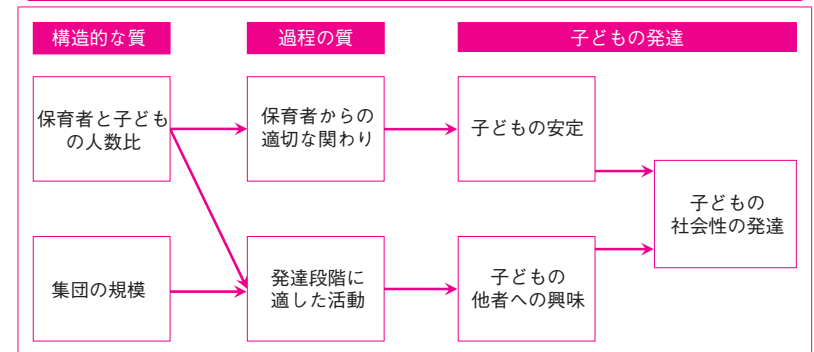
この調査で示された、保育の構造的な質、過程の質、子どもの発達との関係は**図表3-4**のようになります。ここからは、構造的な質は保育の過程の質に関連しており、過程の質は子どもの発達に影響があるという関連性が見てとれます。

調査を行った研究者ハウズは、この結果を解釈して、乳幼児期の子どもよりよい発達のためには、思い通りに動き回れ、なおかつ危険と妨害のない秩序ある環境の下で、子ども自身の興味に基づいた探索的・実験的な行動を自由にとらせることが必要であるが、保育者一人あたり、集団あたりの子どもの人数が多すぎると、そのような活動を安全に提供して見守るのは難しいことが、このような関連性を生み出しているのだらうと述べています。

**図表 3-3 保育者と子どもの人数比と集団規模の基準**

子どもの月齢	保育者と子どもの人数比	集団規模
6～15ヵ月（6ヵ月～1歳3ヵ月）	1対3	6人
16～24ヵ月（1歳4ヵ月～2歳）	1対4	8人
25～36ヵ月（2歳1ヵ月～3歳）	1対8	14人

**図表 3-4 保育の質と子どもの発達**



出典：Howes, C. Phillips, D.A. & Whitebook, M. 1992 Threshold of quality : Implications for the social development of children in center-based child care. Child Development, 63(2), 449-460 を参考に、全国小規模保育協議会作成

もう一つ特筆すべき点は、この調査においては、子どもの発達に影響を及ぼす基準点が示されていることです。たとえば、3歳児のクラスにおいて、保育者と子どもの人数比が1対8以下の場合と、1対9の場合では、過程の質、子どもの発達の両面に、有意な違いがみられました。「子どもを1人増やすくらいのことでは、保育の質にはさほどの影響はないという意見もあるが、調査結果はその意見の反対を示している」とハウズが述べているように、保育の質を保つためには、1人の保育者が担当できる子どもの人数には明らかな上限があるということがわかります。

### 6ヵ月～3歳の追跡調査（2000年 米国）<sup>8</sup>

保育施設に通う89人の子どもに対して生後6ヵ月から36ヶ月（3歳）まで行われた追跡調査です。前述の調査では保育の構造的な質と子どもの社会性の発達に関連に焦点が当てられていたのに対し、この調査では、保育の構造的

<sup>8</sup>Burchinal, M.R., Roberts, J.E., Riggins, R., Zeisel, S.A., Neebe, E., Bryant, D. 2000 Relating quality of center-based child care to early cognitive and language development longitudinally. Child Development, 71 (2) , 339-357

な質と、子どもの認知的能力（言語能力、表現力、理解力）の発達の関係进行分析しています。

その結果、保育者あたりの子どもの人数は、12ヵ月時点の子どものコミュニケーション能力、また、36ヵ月時点で言語の理解・表現能力の発達度合いと有意に関連していることがわかりました。また、子どもが成長とともに語彙を獲得していく速度も、保育者と子どもの人数比に関連しているという結果が出ています。

### 中学生までの長期間追跡調査（1991～2007年 米国）<sup>9</sup>

米国国立小児保健・人間発達研究所は、1991年に、子育て、保育と発達の関係を調べるための大規模調査をはじめました。全米から1,300人ほどの新生児を選んではじまったこの調査は、定期的に子どもたちの保育・教育環境と発達の度合いを測定し、相互の関連性を分析するもので、調査対象の子どもたちが中学3年生になるまで続けられました。これまでに見てきた調査に比べて、対象人数が多く追跡期間も長期にわたるため、乳幼児期だけでなくその後の生涯における学習や発達などと乳幼児期に受けた保育の質との関係についても信頼できるデータを提供している点で、非常に貴重な研究です。

この調査では、保育の要素を先に述べたような構造的要素と保育過程に分類し、また、子どもの発達の評価尺度についても、知的・言語的発達、社会的行動、情緒的発達と母親との関係、身体的成長と健康、という図表3-5のような4分野に分けて評価を行っています。

保育の質のうち、構造的要素については、①保育者と子どもの人数比、②集団規模、③保育者の教育水準について、図表3-6のような一定の基準を満たしているかの評価が行われました。

<sup>9</sup> 日本子ども学会編「保育の質と子どもの発達 アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡研究から」赤ちゃんとママ社 2013

図表 3-5 子どもの発達の4分野

発達の分野	内容
知的・言語的発達	子どもの考える力や、刺激に対する反応の発達 ●注意・記憶 ●言語の使用・語彙・言語理解 ●問題解決・推論 など
社会的行動	子ども同士または子どもと大人との関わり方 ●年齢にふさわしい他者（友達、両親、親以外との大人）との関係を築き維持できるか ●自分勝手、乱暴な行動、孤立などの問題行動の多寡 など
情緒的発達と母親との関係	子どもの情緒的成長 ●安定した愛着を達成し、保護者を信頼しているか など
身体的成長と健康	子どもの身体的特徴、身体的健康 ●病気になる頻度 ●身長・体重など身体的成長 など

出典：日本子ども学会編「保育の質と子どもの発達 アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡研究から」赤ちゃんとママ社を参考に、全国小規模保育協議会作成

図表 3-6 保育の質の構造的要素：月齢別基準

基準			
子どもの月齢	保育者と子どもの人数比	集団規模	保育者の教育水準
6～15ヵ月 (6ヵ月～1歳3ヵ月)	1対3	6人	高卒以上で、その後児童に関わる何らかの専門的教育を受けた者
16～24ヵ月 (1歳4ヵ月～2歳)	1対4	8人	
25～36ヵ月 (2歳1ヵ月～3歳)	1対7	14人	

この結果、図表3-6にある3つの基準を満たしている割合と、子どもの発達度合いの間には、家庭環境などの効果を補正した後も直接的な関連が見られました。たとえば、子どもたちが3歳時点の調査では、保育施設が満たしている基準の数が多いほど、子どもの言語能力は高く、また、社会的行動分野では問題行動が少ないことが認められています（図表3-7参照）。

この研究では、それぞれの構造的要素が各発達段階で与える影響の度合いも考察されています。2歳の時点では、「保育者と子どもの人数比」が子どもの

図表 3-7 子どもの発達と保育の質の基準

保育者と子どもの 人数比	どれか1つだけ基準を 満たしている ○××	2つの基準を 満たしている ○○×	すべての基準を 満たしている ○○○
集団規模			
保育者の教育水準			

出典：Burchinal, M.R., Roberts, J.E., Riggins, R., Zeisel, S.A., Neebe, E., Bryant, D. 2000 Relating quality of center-based child care to early cognitive and language development longitudinally. Child Development, 71(2), 339-357 を参考に、全国小規模保育協議会作成

発達に与える影響がもっとも大きい一方、3歳の時点では「保育者の教育水準」が最大の要因となっています。

### 米国における研究事例とその示唆

日本の乳幼児保育を考えるうえで、これら米国での研究結果から学べることはなんでしょうか。米国と日本では保育の価値や構成方法、保育施設や園庭、保育者の資格等についての基準が異なるばかりか、子どもが最終的に市民として培う能力についても、米国の調査で評価基準に用いられたような明確な共通認識があるとは言い難い面があります。その違いを考慮に入れても、保育の構造的な質・過程の質と子どもの発達の間には、無視できないレベルの関連性があると言えるでしょう。上記の研究で示された、保育者と子どもの人数比と集団規模の基準を、日本の従来の保育所ならびに小規模認可保育所で採用されている基準と比較してみると、図表3-8のようになります。

日本で保育所の設備、人数などを規定する児童福祉法には、クラスの規模についての規定はありません。2009年に全国社会福祉協議会が行った調査によると<sup>10</sup>、認可保育所の0歳児クラスの定員規模は「7～9人」が最多、1歳児クラスでは「11～15人」、2歳児クラスでは「10～20人」が最多でした。しかし同じ調査では、1・2歳児に多い待機児童に対する弾力化措置の影響もあり、認可保育所ではこの年代のクラスに定員以上の子どもを受け入れる傾向があること、その結果、20人以上の集団で過ごすクラスの割合は、1歳児クラスでは14%、2歳児クラスでは22%であることもわかっています<sup>11</sup>。翻って、小規模認可保育所の定員基準は、6～19人となっています。

また、保育者と子どもの人数比については日米の基準に大きな違いはないものの、1歳児クラスでは、米国基準<日本の小規模認可保育所<日本の一般認可保育所の順に、2歳児クラスでは、日本の小規模認可保育所<米国基準<日本の一般認可保育所の順に、子どもの数が多くなっていることがわかります。

図表 3-8 米国の研究で示された基準と日本の基準

子どもの年齢			保育者対子どもの人数比	集団規模
0歳クラスまたは 6～15ヵ月児	日本	認可保育所	1対3	規定なし
		小規模認可保育所	1対3+保育者1名	6～19人
	米国		1対3	6人
1歳クラスまたは 16～24ヵ月児	日本	認可保育所	1対6	規定なし
		小規模認可保育所	1対6+保育者1名	6～19人
	米国		1対4	8人
2歳クラスまたは 25～36ヵ月児	日本	認可保育所	1対6	規定なし
		小規模認可保育所	1対6+保育者1名	6～19人
	米国		1対7	14人

作成：全国小規模保育協議会

<sup>10</sup>全国社会福祉協議会「機能面に着目した保育所の環境・空間に係る研究事業総合報告書」2009

<sup>11</sup>村山博文「保育所編 園の体制：【第1回 幼児教育・保育についての基本調査報告書（幼稚園編・保育園編）】」ベネッセ次世代育成研究所 2009

集団の規模と、保育者と子どもの人数比は、子どもの認知能力・非認知能力両方の発達に影響があることはこれまでに見てきたとおりです。これまで日本の認可保育所は、人数比率の面では、良好な発達に必要とされる基準を満たしているか、基準に比較的近い状態で運営されてきました。また、保育の質においても、保育に関する専門資格や養成校の設置など、制度の面からの充実が図られ、質の維持については一定の評価があります。しかし集団規模の点では、法令上規定がないこともあり、適正規模よりも大きなクラスが多くみられるようです。2015年度から制度運営が開始した小規模認可保育所では、全年齢にわたり望ましいとされる保育者の人数比率を上回る配置が可能なおうえ、集団規模についても乳幼児の発達にとって望ましいとされる基準を満たすか、それに近い状態での保育を行える可能性が高いと言えるでしょう。

### 日本国内における研究

これまでは米国の研究結果を見てきましたが、最後に日本における最新の動向を紹介したいと思います。ここで取り上げる慶應義塾大学総合政策学部准教授の中室牧子氏は、章の冒頭で紹介したヘックマンと同じく「教育経済学」という観点から保育の質に関する研究を行っています<sup>12</sup>。

中室氏は現在、保育環境が乳幼児の発達に与える影響に関する調査を行っています。「就学前のどのような保育・教育が子どもにとって最も良いのか」ということを具体的に明らかにするためです。この調査は、経済産業省・経済産業研究所の研究プロジェクトに認定されており、調査結果は今後の政府の保育政策に役立てられる予定になっています。

調査は、26の保育所（うち20園が小規模保育所）で0～6歳までの子ども計505人に対して行われており、私たち全国小規模保育協議会の加盟園も調査に協力しています。正規社員・パート・臨時雇用のそれぞれの保育者の数や、

<sup>12</sup>中室牧子「『学力』の経済学」ディスカヴァー・トゥエンティワン 2015

各保育者の性別・年齢・保有資格・経験年数などの属性、アンケートによる子どもの発達度合いの調査、さらに、訓練を受けた調査員が実際に園に赴きおもちゃでの遊び方や発話の様子を観察するなど、子どもの行動や保育環境に関する調査が約6ヵ月かけて行われ、2016年中に結果がまとまる予定となっています。

保育の質と子どもの発達との関係を明らかにするためには、長期的な追跡調査が必須となることを考えると、今回の調査はまだほんの入り口にしか過ぎないかもしれません。ですが、このような研究が日本においても行われることはとても重要なことです。なぜなら、子どもの発達にとって、また、子どもの将来にとって重要だと考えられている非認知能力の獲得に保育所が実際どれだけ貢献できるのか、さらにはそうした貢献のためにはどのような保育環境が最も望ましいものであるのか、ということを具体的な数値でもって明らかにしてくれるからです。この一連の研究結果が、小規模保育に限らず、子どもたちにとってより良い保育の実現に繋がっていくことが期待されます。

## 3-2. 小規模保育に対する保護者・保育者の声

それではここで、実際に小規模認可保育所に子どもを預けている保護者へのアンケート結果を見てみましょう。

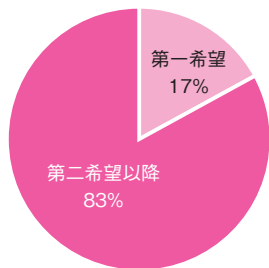
全国小規模保育協議会では、2015年10月に、会員団体の運営する小規模認可保育所の保護者に対して満足度調査を行いました。調査対象となったのは東京都と宮城県内の全15園、159人の子どもの保護者で、およそ86%から回答を得ました。

図表3-9の通り、在園中の小規模認可保育所が第一希望の入園先だったと回答した保護者は全体の17%でした。さらにそのうち60%が理由として「小規模であることに魅力を感じたため」と回答しています。一方で、第一希望ではなかったと回答した保護者は83%にのぼり、さらにそのうちの70%が理

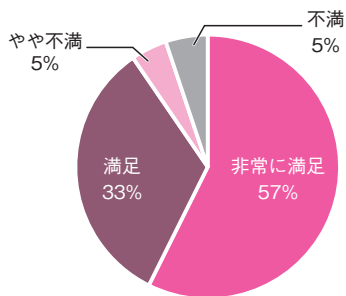
由として「3歳以降の預け先を探す必要があるため」を挙げています。これは、4章で後述しますが、今後小規模保育の普及にあたり、3歳以降の預け先が大きな課題となっていることを表しています。

一方で、**図表3-10**の通り、保育に対する満足度は非常に高いことがわかりました。「少人数で子どもに対して手厚い、目が行き届いているので安心」という回答が多く、「引き継ぎなど、保護者に対するスタッフの対応がきめ細やか」という回答もありました。少人数だからこそできる、親子それぞれに対しての手厚さが評価されていることが見て取れます。また、異年齢保育が良いというコメントも見られました。

**図表 3-9** 現在利用している小規模認可保育所の入園希望順位



**図表 3-10** 現在利用している小規模認可保育所に対する満足度



## コラム

### おうち保育園 保育者の声

おうち保育園は、認定NPO法人フローレンスが運営する、9～12人定員の小規模認可保育所です。

#### 【子ども一人ひとりに対する共感と保育】

乳児期はゆったりした中で、一人ひとりの好奇心に気づいてあげたいと思っています。「あれやりたい」という気持ちを認めてもらえることは子どもにとって大切なことだと思います。

小規模保育では、担当じゃなくても近い距離に一緒にいるので、昨日は「わんわん」って言わなかったけど今日は言ったとか、初めてスキップしたとか、子どもたちそれぞれについて気づいてあげることができます。それが出来た瞬間、今日出来たんだっていうのに気づけるから、それだけ子どもに共感することができます。

一方で、気をつけなくてはいけないこともあります。2歳児は、大きい子の真似をして、あれもこれもやってみよう！と思う時期です。大きな子がいない分、保育士が子どもたちの好奇心をうまく誘導していく努力が必要になります。

小規模保育では、保育士の人数が少ない分、軽いフットワークで新しいことに挑戦していくことができます。子どもたち全員の様子を、保育士全員で共有しながら、より良い保育を目指していきたいと思っています。

(認可保育所常勤5年、2015年度から東京都内の「おうち保育園」勤務)

#### 【お散歩で近所の方と交流】

実際に勤務してみて、小規模っていいな、と肌で感じています。

先生の配置も手厚いので、子ども一人ひとりがよく見てもらえていることを実感します。私の働く園では自己肯定感を育むことを推奨していて、子どもにあまり「ダメ」とは言いません。もちろん、危険なことは危険だと伝えていますが、子どもの意思をしっかりと確認しながら保育をしている、

一人ひとりを受け入れているんだなと温かい気持ちになります。

また、園庭がないからお散歩にたくさん行けることが新鮮で楽しいです。子どもと手をつないで信号を渡るなんて、あたりまえのことですが大規模園ではあまり多くはできないことですね。

近所の人との交流もさかんで、お散歩に出ると声をかけてもらえたりして子どもたちもとっても楽しそうです。

(2015年度から東京都内の「おうち保育園」勤務)

## コラム

### おひさま保育室 小規模保育を日本のスタンダードに

東京都東久留米市。東京とは思えない閑静な住宅街の一角に「おひさま保育室」があります。もともと住居として使用されていた家をそのまま保育室に転用しており、一歩足を踏み入れた瞬間から温かさが伝わってくる、そんな空間です。

「おひさま保育室」のルーツは、2012年にスタートした「家庭的保育<sup>13</sup> おひさま保育室」にあります。2015年4月に始まった「子ども・子育て支援新制度」に伴い、小規模保育事業A型の認可保育所へと移行しました。現在は「一般社団法人 あんずの木」がその運営を担っており、定員は11人となっています。

室長の和田優子さんは、元々東久留米市の市立保育所で13年保育士として勤めたのち、大学事務などの仕事を経て、家庭福祉員<sup>14</sup>になり保育の世界に戻ってきたという経歴をお持ちの方です。

ある出来事が和田さんに小規模での保育という道を開かせることになりました。

「2008年、臨時保育士として久しぶりに保育の現場に復帰することになりました。そこで私は、保育の現場が大きく変化していたことに気付いたのです。時代と社会状況が変わり、保育士は質量ともに様々な種類の仕事に追われていたのです。

待機児童解消のためには多くの児童を受け入れなければならず、それを引き受け最善な保育を提供しようとする保育士の積極的な意欲も感じました。しかし、どんなに質の高い保育士であっても、互いの保育観を共有するような場を持つ余裕もなく、様々な規範に縛られていては能力をなかなか発揮できず、葛藤を抱えます。

ある日、親しくなったある保育士が「保育士をやめたい」ということを口にしたのです。「キャリアもあり、こんな素敵な保育士が保育をやめてしまうなんて、そんなのおかしい！」そう思った私は、彼女自身が彼女のしたい保育ができる方法が何かないだろうかと考えました。そして認可外保育に取り組む友人のアドバイスによりたどり着いた答えが、家庭福祉員という制度を用いた小規模な保育でした」

保育士が自ら実践したい保育を追求する余裕を持てること。「人生の入り口」という大切な時期にある子どもたち一人一人と真摯に向き合えること。2012年5月、「おひさま保育室」は和田さんのそんな想いから始まりました。

「家庭福祉員を始めたのも、初めからその保育の意味を理解していたわけではなく、たまたまたどり着いたものでした。でもいざ始めてみると、「すごい！」って思ったのです。私が最初に保育士になった東久留米市の公立認可保育所では歴史的に「東久留米方式」といって大型園は施設建設の時から0～2歳児を4クラスに分け少人数で保育をしていました。その時代に同僚の保育士たちと、子どもたち一人一人としっかりと向き合うことの大切さについて学び合い、「脳と保育」や心身の発達に関係する書籍などを読んで質の良い保育に取り組んでいましたが、自分で0～2歳児少人数混合保育をやってみて、改めてその重要性が実感を持って分かり、目が覚めたような思いでした。

私は「人が人であるとはどういうことか」を学び、考え、人を、社会を

<sup>13</sup>家庭的保育とは、保育者の居宅、その他の場所で行われる5人以下の異年齢保育のことで、「子ども・子育て支援新制度」において行政の認可事業として位置づけられている。

<sup>14</sup>家庭福祉員とは上記の家庭的保育を担う人物を指す。



信頼し、それに支えられ、またその経験を基に今度は自分が支える側の人間になり、気前よく自分自身の力を社会に還元していく、そんな人たちが育っていく場を作っていきたいですし、そういう社会にしたいと願っています。

わたしたち「おひさま保育室」は小さな場所ですが、それを実践している存在でありたいと思っています。でも、それだけではなく、0～2歳児の保育は小人数で、あるいは小規模で丁寧に、というのが日本のスタンダードにならないかと願っています。」

試行錯誤の末、小規模での保育という「答え」にたどり着いた和田さんは、誰よりも小規模保育の重要性を実感しており、「おひさま保育室」だけにとどまらず、今後は「小規模保育がスタンダードになるように」その活動を広げていきたいと語ってくれました。

「小規模保育はヨーロッパ先進国では当たり前になっているようですが、日本ではまだまだ新制度も始まったばかりで、その認知度の低さに戸惑いを感じることも多くあります。次世代の子どもたちを育て、将来のより良い社会を作るということを大切に思う多くの方たちと協力して、粘り強く活動を続けていきたいです。」